

# 労働の科学

*Digest of Science of Labour*

2020  
*December*  
Vol. 75, No. 12



## 特集 希望と社会的参加 働くことの未来・持続可能な社会(3)

ポスト・コロナの社会構想—分散型システムへの移行と「生命」の時代／広井良典  
地方圏における持続可能な経済社会の創出—生活を支える仕事を創り、「なりわい」を育む／石井まこと  
社会を支える「働く人」の安全と健康を考える／福成雄三  
雇用形態間格差による分断を乗り越える—「働き方」ではなく「職務」を軸にした社会づくり／禿あや美  
希望をつくる地域就労支援政策／上林陽治  
労働安全衛生マネジメントシステムの活用促進から今後の労働安全衛生法令・対策のあり方を考える／古谷杉郎  
働く場所と時間を自由に選択する「テレワーク・在宅勤務権」の確立を／亀岡秀人  
女性活躍は社会と文化を変えるか—ドイツの女性クォータ制が示唆すること／飯田恵子

巻頭言

希望をつくる対話  
暉峻淑子

歌舞伎で  
生きる人たち⑬  
湯浅晶子

Between⑫  
高見晴恵

連載

# 労働の科学

2020  
December  
Vol.75, No.12

巻頭言 俯瞰 (ふかん)

## 希望をつくる対話

暉峻 淑子 [埼玉大学 名誉教授]

1

作品 Water Colour : 個展  
素材 水彩紙・インク  
2008年9月2日~14日  
ギャラリーマロニエ4・京都  
Gallery Maronie 4  
撮影 小池 晃  
表紙デザイン: 大西 文子



## 希望と社会的参加

### 働くことの未来・持続可能な社会 (3)

#### ポスト・コロナの社会構想

分散型システムへの移行と「生命」の時代

..... [京都大学こころの未来研究センター] 広井 良典 ..... 4

#### 地方圏における持続可能な経済社会の創出

生活を支える仕事を創り, 「なりわい」を育む

..... [大分大学経済学部経済学科] 石井 まこと ..... 10

#### 社会を支える「働く人」の安全と健康を考える

..... [公益財団法人大原記念労働科学研究所] 福成 雄三 ..... 16

#### 雇用形態間格差による分断を乗り越える

「働き方」ではなく「職務」を軸にした社会づくり

..... [跡見学園女子大学] 禿 あや美 ..... 22

#### 希望をつくる地域就労支援政策

..... [公益財団法人地方自治総合研究所] 上林 陽治 ..... 26

#### 労働安全衛生マネジメントシステムの活用促進から

#### 今後の労働安全衛生法令・対策のあり方を考える

..... [全国労働安全衛生センター連絡会議] 古谷 杉郎 ..... 32

#### 働く場所と時間を自由に選択する「テレワーク・在宅勤務権」の確立を

..... [日本ILO協議会] 亀岡 秀人 ..... 36

#### 女性活躍は社会と文化を変えるか

ドイツの女性クオータ制が示唆すること

..... [独立行政法人労働政策研究・研修機構 調査部] 飯田 恵子 ..... 42

**Graphic**

ディーセント・ワークを目指す職場 24 [見る・活動](119)  
 ..... 長須 美和子 ..... 口絵

**Series**

時評：労働科学  
 教員の過労災害事案と  
 高裁逆転勝訴判決の意義..... 藤川 伸治 .....48

**Column**

Between (12)  
 「傷」について..... 高見 晴恵 .....51

KABUKI

恋飛脚大和往来 封印切, 新口村  
 歌舞伎で生きる人たち その十参——心をうごかす..... 湯浅 晶子 .....52

Cinema

『花筐／HANAGATAMI』  
 大林宣彦監督が伝えたかったこと..... 小林 祥晃 .....54

Information.....56

次号予定・編集雑記.....58

労働の科学：第75巻 総目次.....59

# 希望をつくる対話

暉峻 淑子

コロナ禍の試練が続く中で、人間の本性でもあり特権ともいわれる「対話」が失われていくことに、私たちは鈍感すぎるのではないだろうか。

言葉は、本源的に対話から生まれ、言葉の本質は対話の中にある。子どもが言葉を使うことができるのは、乳児に対して分かって分かっていなくても語りかけてきた親の「対話への働きかけ」があったからである。それが子どもの応答能力を誘い、親子の応答・対話の中で、子どもはしだいに他者と通じ合う快さと言葉の意味を知ることになる。この対話的応答能力は、教育を可能にする土台ともなっているのだ。

対話は、勝ち負けを決めるための言葉ではない。意図的にある結論を持つていくための言葉でもない。対等な人間関係を前提とした相互性のある話し方で、話すことと同じように聞くことを大切にすること。対話は、なま身の身体を持ち寄って、人格全体を反映させながら相手に語る言葉である。双方の言葉の往復の中から新しい視野が拓かれ、創造的なアイデアが生まれる。対話は、あらゆるものの培養土であり、民主主義に最もふさわしいコミュニケーションの言葉だと言われる。ところがすでにコロナ禍以前から日本の社会には大切な対話が失われつつあった。買物をするときもカゴの中に、ほしいものを放り込みレジをすませれば、一言の言葉もいらぬ。銀行の窓口で言

葉を交わさなくてもカードで済ませることができ。患者と医師の間に、ていねいな対話はなく、コンピュータの結果だけが伝えられる。会社の中でも一方的な伝達、職務命令、指示、仕様書が言葉のほとんどであり、学校では忙しすぎる先生からの一方的教育が行われる……。

そんな社会の中で、最も深刻なのは、労働の現場で2次3次下請け孫請け非正規労働者が混在し、コストと効率性が優先されるため、良心的な知識や技術の伝達者が困難になっていることだ。仕事の発注者が発注結果をきちんと自身で点検しないで、点検も下請けに任せることが多い。良心的な仕事をしようとするモチベーションが失われるのは当然だ。

昔は先輩から後輩への技術や知識の伝達は日常的に對面的・対話的に行われてきた。対話の中では失敗経験も必ず伝えられた。一般的指示書には、基準的なことしか書かれていないので、基準が作られる前段階で多くの討議や失敗があり、多様な経験と対話の積み重ねがあつて、その結果、作られた基準であることが伝わってこない。

医療の現場では経験を積んだ医師の診療に付き従う中で、インターン生がはじめて診療の実地を習得していく。そして先輩が初心者の技術や判断を横で監督して、その場その場にふさわしい適切な指導や助言をするように、本当の知識や技術は具体的な事実即ち対話的指導が



てるおかいつこ  
埼玉大学 名誉教授 経済学  
主な著書  
・「対話する社会へ」 「社会人の生き方」  
「豊かさとは何か」以上、岩波新書

なければ、決して当事者の身に着くことはない。自分で考えて的確な判断と行動で対処する能力はインターネットや仕様書で代替できない。人間は何によって良心的に行動するか。何が生きがいになるか。深く考えてみたい。

基準を示されるだけだと、効率性を優先する風潮のなかでは、基準緩和はいいことだ、基準どおりにしなくてもバレたり事故を起こさなければそれでいい、という甘い考えが横行し、違和感さえも持たれなくなる。国際的に有名な日本の巨大企業がコンプライアンス違反を起こし会社破綻に至る背後には、必ず対話なき上意下達と一部の管理者の独裁がある。効率優先市場主義に対する抵抗勢力となりうるのは、対話的文化を身に着けた人々の対話的思考と行動であり、新しい希望はそこから生まれると私は確信している。